

日本の諷刺詩

一九二三年五月二日燕京大学文学会での講演

こうした諷刺詩は日本では“狂句”と称され、ふつうには“川柳”と呼ばれる。狂句は俳句の変体で、ちょうど狂歌が和歌の変体であるように。当初俳諧連歌から異体が発生し、まず七七の二句を出して題とし、各人に五七五の三句を続けさせ、“前句付”と名付ける、その前句は努めて意味の広範なものを取り、それによって続ける者が自由に構想できるようにする。『文学小話』ⁱに載せてあるのがその一例である。

丸くて四角、長くて短し、

丸盆に豆腐半挺持つ跣跛

同

月をくむ重ね井づつのなはつるべ

山崎宗鑑の『犬筑波集』にも同類の句が収められている、いまその一つを録する。

いりたくもあり、いりたくもなし、

貧僧のすこしもちたるまめのたね

以上挙げたのは、もし前句がなければ、意味があまりはつきりしない。しかしまた、たとえ独立しても完全な意味がある、多くの句もある。例えば次の一句。

こはい事かな、こはい事かな、ⁱⁱ

雷を真似て腹掛けやっとさせ。

そこで前句付はついに前句を振り払い、十七字の滑稽詩になり、先に“俳風狂句”と称したのが、後で祖師川柳の名によって“柳風狂句”と称され、いまではただ“川柳”と称される。

緑亭川柳、本名は柄井八右衛門、十八世紀後半に生まれ、もともと芭蕉派の俳人でもあった。そのころ前句付は盛んであったけれども、まだ別に門戸を立てず、開業して生徒を教えた“点者”は多くが俳人兼業であった。川柳はこの小詩の独立の価値を認め、俳壇を離れて、もっぱらこの方面を扱った。これが祖師になった理由である。この派の句集には、『柳樽』があり、陸続と刊行され、三百八十余巻あり、また『古今前句集』二十巻があり、代表的な総集である。現代でもとても盛んで、『新川柳六千句』、『当世新柳樽』などそれに雑誌も頗る多い。

川柳の形式は俳句と同じであるが、用字はさらに自由で、“季語”などの制限もない。内容的には、当初両者はともに恢諧味及び言葉の揶揄いに重きを置いたが、ただ“蕉風”の句は閑寂趣味に傾き、“高踏派”の小詩になり、川柳も遊戯の文章から諷刺詩に変わった。あるいは風俗詩と称してもよい。川柳の諷刺は大抵類型的で、遊び人に迂儒、逃亡負債の類など、すべて“柳人”の好材料である。だが諷刺の対象は別に特殊な事項に限らない。ごく普通の習慣や言動でも、奇警な着眼と造句によって、極めて巧妙な略画に変わる。よい川柳は、その妙所はまったく確実に情景の要点を掴んで、少しの遠慮もなくしかもまた含蓄に富んだまま投げ出して、読者をしてちくりとした痛みを感じさせるところにある。またちょうど辛子を食べ、涙が出そうになるが、

あつという間に過ぎ去り、決して唐辛子のような粘着がないようなものである。川柳は人情の機微を穿ち、根本的にはなんの悪意もなく、われわれがそこに書かれた世相を見て、思わずうなずき微笑する。だが一面そうした人情の弱点により、あるいは逆に人の世のさらに愛すべきを感じる。だからその諷刺は、樂天家の頑世不恭の態度であって、決して厭世家の呪詛ではない。徳川時代前期の文芸は、上方（京都大阪）を中心とし、のちには形勢が転換して、江戸にやってきた。川柳は江戸文学の一支流で、機警洒脱の面では、最もよく東京人の“江戸っ子気質”を代表するものだと言える。

外国の諷刺詩を紹介しようとするには、二重の困難がある。どの国のものであろうが、原文の一篇のみが詩であって、そのほかはすべてそうではない。だからわれわれが詩を訳すに、まず自分の書くものは原詩ではなく、原詩の散文注でしかないことを認めなければ、筋が立たないように思う。しかし諷刺詩のおもしろさは大半が詩形の上にあつて、もし意味だけあつて形式を欠くなら、特色を失って、うまくいっても笑林の一条でしかなくなる。その次に、諷刺詩には多く風俗の分子が含まれ、説明を加えなければ分かりにくく、説明を加えれば加えたで原有のおもしろさが減ってしまう。いまはつきり分かりやすいものを三十八句選んで、以下のように解説し、その一斑を示そう。第一句に原文を加えて、以下は省略する。

一、Kaminario Manete Haragake Yatto Sase.

かみなりのまねをしてようようはらがけをさせた

二、“とてもきれいだったそうで” ごさいいう

三、せんこうをさしてまえのよめをほめ

四、川施餓鬼嫁物語船が着き

五、汝等は何を笑うと隠居の屁

六、銀煙管落としたはなし三度きき

七、ながいきやくしまったきせるをまただして

八、河東節親類だけに二段きき

九、なきなくもいい方をとる形見分

十、にどまけてそれからもちだすしゃっきんばなし

十一、“おりません”くるのをみすかすおおみそか

十二、かんゆういんこんどはほめるにわのまつ

十三、医者衆は辞世をほめて立たれけり

勧誘員は大抵が保険会社の雇い人で、生命保険の勧誘を商売にする、辞世は臨終に読む歌。

十四、ねてゐるは第一の薬取

これは以前の漢方医が空威張りをしているのを形容した句。

十五、てそうをみいちいいだすわるいとこ

十六、武者一人叱られて居る土用干

三伏に着物を干すのを Doyoboshi という、その時侍だけはまるで役に立たないので、家人から詰られる。今では武士階級は無くなったが、そうした情景はまだ存在する。

- 十七、むかいからすずりをつかういそうろう
- 十八、しらぬじをかりになにじとよんでおく
- 十九、涼み台天はどうしたものという
- 二十、よくみればてにしたものはみんなしぶがき
- 二十一、にかいからころげておちるいまわのさわぎ
- 二十二、墓口が凸凹になる月給日
- 二十三、ごらくにうまれたいとてきふにえん
- 二十四、錦着て帰れば人の妻なりき
- 二十五、ひしよりよかんとりの“まるまげ”にせみたい
- 二十六、烟草店新丸髷に客が減り

丸髷は丸い形の髷で、結婚した女性が初めて結う。

二十七、“さくばんは……”たがいにいつつしたをだす
この句は遊び人同士が出会った状況を形容したもの。

- 二十八、おとこまえ——“おれをみたか”とつれにとう
- 二十九、ほれぐすり十日過ぎても沙汰はなし
- 三十、空閨を守る男の大あばた
- 三十一、大詩人病身にして酒が好き
- 三十二、羅馬字を急所へはさむ象徴派
- 三十三、とらのなきこへをきかれて儒者こまり
- 三十四、細見は四書文選の間によみ

これらはいずれも儒生を嘲ったもので、『細見』は指南のようだが、もっぱら吉原の情形を述べたもの。

三十五、かぐらざかついにしなごではらをたて
これは中国の留学生を形容したもの。あとは詠史の句である。

- 三十六、じんのうのうわごとはただしたうち
- 三十七、堯舜の代には錠前直し来ず
- 三十八、喰ひますかなどと文王そばへ寄りⁱⁱⁱ

日本の旧学者は中国の習気に染まっており、経史子集だけを文学だとする。のちになって改革され、小説戯曲も入れるようになったが、まだ偏見があり、その中でも相変わらず優劣があり、俳句は高く、川柳は低い文学だと思われている。従来の雅俗の意見を執着しているようだ。われわれも川柳の文句は俗すぎて、優美な文学にはならないと思っている。しかしこれは間違っている。われわれは誠実に川柳には多くの粗野鄙陋なところがあることを認めざるを得ない。だがこれは決してその欠点ではない。そのすべての人事に対する真率にして拘りのない態度はやはりその長所であり、それがパリサイ人の文学に勝る所以である。川柳の欠点は、それが理知に過ぎ、その教訓と罵倒にあるとわたしは思う。その次は、もっと重大だが、その反動思想である。ジョージ・ムーア（George Moore）はかつて民衆思想はすべて反動的だと言ったが、川柳は日本の民

衆化した詩である、だからその思想も保守に偏っている。民間に自然に発生した詩謡ですらなおこうなることを免れない、詩人の手中では無論もっと甚だしい。なぜなら彼らは教育の影響を受けて、思想はもっと統一されているからである。明治維新以後の川柳は、とても発達したけれども、却って儒教の専制思想に充ちており、新しい事物に対してつねに無理な反対をし、しかもまた軍国主義の毒にあたって、精忠報国の言葉を詩の中に混ぜ込もうとする人がいるが、これは大きな誤りと言わざるを得ない。少しぐらい粗野鄙陋な言葉を使うことはまだ詩にとって無害であるが、正大光明の国家主義、あるいは綱常名教の言葉を使うなら、逆に全く詩ではなくなってしまふ。

※初出：1923年6月1日『晨报・文學旬刊』第1號

ⁱ 関根正直「文学小話」十四、実陰卿の前句附。『帝国文学』第1巻第11号（1895年11月）

ⁱⁱ 周作人の訳は「忙碌！忙碌！」となっていて、これは「忙しい事、忙しい事」という意味だから、彼の理解には少し齟齬があるようだ。

ⁱⁱⁱ 川柳の原典 主に『俳風柳多留』と『新川柳六千句』（大正6年南北社）など。出処不明のは仮に訳をつけ、ひらかなで標記した。漢字交じりのは根拠を確かめられたものだが、引用三十八首のうち二十一首に過ぎない。十二、二十五、三十五などは近代の川柳であろう。